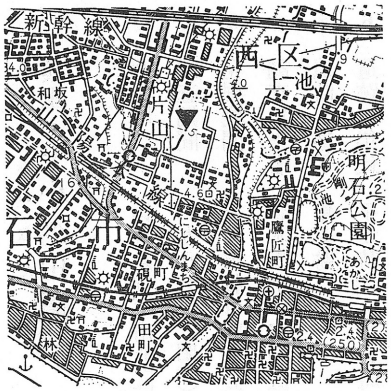
兵庫・吉田南遺跡

1　所在地　兵庫県神戸市西区玉津町・明石市北王子町
2　調査期間　一九九〇年（平2）一〇月～一九九一年三月
3　発掘機関　兵庫県教育委員会
4　調査担当者　種定淳介・西口圭介・長濱誠司
5　遺跡の種類　集落跡
6　遺跡の年代　弥生時代～近世
7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

吉田南遺跡は明石川下流右岸の完新世段丘・旧河道に位置する。神戸市玉津環境センター建設に伴う数次の発掘調査（一九七五年～八〇年にかけて神戸市教育委員会、吉田・片山遺跡発掘調査団が実施）によって、弥生時代～鎌倉時代にかけての複合遺跡であることが判明し、その内の奈良時代後期から平安時代前期にかけての遺構は明石郡家（ないしは明石駅家）に比定されている。



（明　石）

一九八七年度には環境センターの南東に隣接する旧農業試験場跡地（約一〇万㎡）の確認調査が実施され、遺跡が南へ拡大することが判明した。今回の調査は、この試験場跡地に県立看護大学が建設されることを契機とするもので、一九八九年度～九一年度にかけて建設予定地内の全面調査を実施している。九〇年度の調査地点は環境センターから南方へ約二五〇ｍの地点にあたる。

調査の結果、古墳時代前期と推測される水田跡、奈良時代後期の溝、平安時代中期の柱穴群、鎌倉時代～室町時代の柱穴群などが検出された。室町時代の柱穴群には根石を伴うものもあり、数棟の掘立柱建物が復原できる。一九九一年度の調査結果を勘案すると、これらの建物群の四周には幅約三ｍ、深さ一・五ｍ程度の溝がめぐっており、三二ｍ×三六ｍ程度の長方形の区画が存在したものと認識できる。また、区画内には井戸・溜井戸が検出されている。遺物は、遺構が存在する各時期の土器が出土しており、奈良時代では二点の墨書のある須恵器が含まれている。また、井戸・溜井戸からは、井桁・曲物・臼・下駄・漆椀などの木製品が出土している。

さて、木簡は、上層より掘り込まれた二本の近世の溝から一五点出土した。溝一からは⑴～⒁、溝三からは⒂が出土している。溝一は中世の長方形区画の東辺の溝と重複し南流する幅四ｍ以上、深さ一・五ｍ程度の溝である。厚く腐植土が堆積しており、木簡のほか漆椀・箸・楊枝・らおなどの木製品三〇〇点余りが、一八世紀を前

後する多量の近世陶磁器・土師器類とともに出土している。遺物の出土する範囲は限られており、遠方より流れてきた状況ではない。溝三は東西方向に走る幅一m、深さ五〇cm程度の溝で明治時代以降まで使用されていた農業用水路である。

8　木簡の釈文・内容

(1)
「宝永参年戊正月吉×　(223)×47×4　019

(2)
□□五拾文廿□四日」　(167)×(26)×5　065
〔口分カ〕〔二カ〕

(3)
・□五夊」　(141)×32×2.5　059
・□□」

(4)
・□□　□□
石や吉兵衛殿　尚兵衛　○　」
・□大□　内百八拾八入□　○　」　(180)×32×4　019
〔豊カ〕

(5)
・□　□□
万四郎　天
万四郎
・□　あ八ちや
天
岩　(96)×(93)×8　081

(6)
・あ八ちや
□□□　□
〔之カ〕
□　□
・万□郎
〔八カ〕
〔家カ〕　(85)×(92)×5　081

(7)
・「　見明屋□□
○□屋□□
〔豆カ〕
・「○□□□　□□□」　120×44×6　011
〔すすさカ〕　〔七七入カ〕

(8)
「○　子五月□□
□□　□□
〔村カ〕　〔四カ〕
作兵へ
□□□　(132)×27×3　051

(9)
・□□　□
〔順カ〕
・□　(85)×(32)×4　081

(10)
・□三郎
・□□　(80)×(16)×3　081

(11)
□や　(38)×(18)×3　081

(12)　・□□□太郎□□〔兵衛カ〕ゟ弥右衛門□□

・升伝

弥右衛門　(169)×22×7　081

(13)　・○□〔伝カ〕□□衛門

・○　ふしへ村　尚兵衛　□　(133)×19×6　051

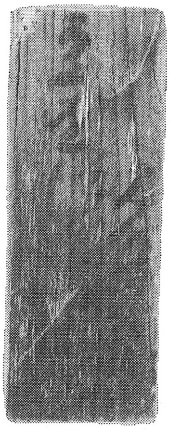
(14)　「<□　(109)×(29)×8　039

(15)　・「ら□□

・「山□　(92)×47×5　019

木簡一五点のうち、切り込みを入れたり穿孔を施したりするなど、付札の態をなすものは五点、その他は薄板・箱物などの材への墨書である。宝永三年（一七〇六）の紀年銘をもつ(1)は、六カ所に木釘が遺存している。(9)(10)(11)は材質からみて、当初は一つのものであった可能性がある。(5)(6)は文面、板の材質・厚さからみて元は一枚の板であった可能性が強い。両者とも裁断され一部加工が施されたため、接合はしない。(6)裏面の「家」は墨痕が重複しており、(5)と同様「天」の可能性もある。(7)は上隅に釘孔が残る。(13)に記された「ふしへ村」（藤江村）は、吉田南遺跡の南西約二㎞に位置した村名である。(14)は一端に切り込みを入れるものである。墨書は削られ部分的に残存している。なお、〇三三型式で墨痕がないもの（150×33×8）がもう一点溝一より出土している。

(1)



(7)表

木簡の釈読については、兵庫県立歴史博物館の諸氏のご教示を得た。なお、釈読は現在も継続中であり、補訂の余地があることを申し添えておく。

9　関係文献

田辺昭三「兵庫・吉田南遺跡」（『木簡研究』一　一九七九年）

岡崎正雄「兵庫・吉田南遺跡」（『木簡研究』一一　一九八九年）

（西口圭介）